

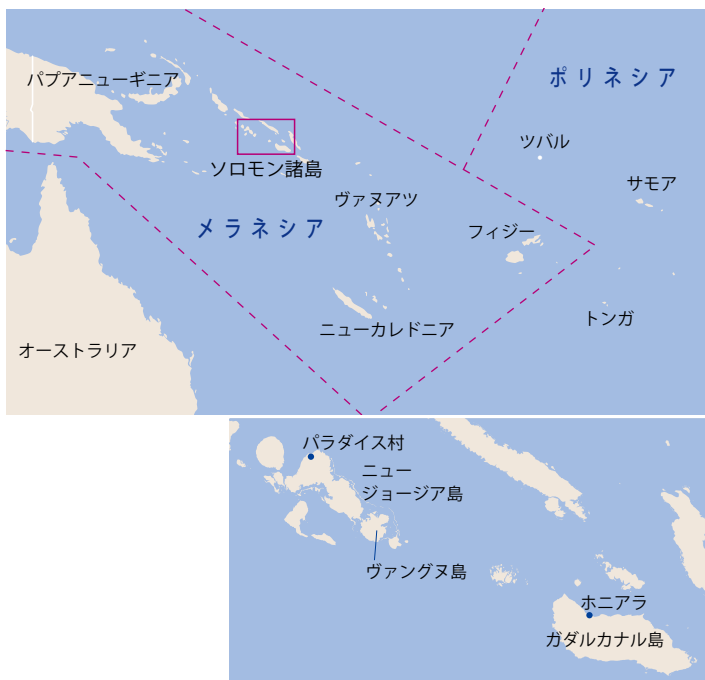
# 南太平洋でフィールドワークをする ソロモン諸島の宗教と社会

石森大知 いしもり だいち / AA研究機関研究員

インタビュー—石川博樹（編集部）

今回は、ソロモン諸島を中心に南太平洋の島々でフィールドワークを行っている人類学者の石森大知さんにお話をうかがいました。

ソロモン諸島の人びとが独自に発展させたキリスト教に基づく宗教運動やこの地で起こった紛争と人びとの関係についての石森さんのご研究、また理系研究者との共同研究における貴重な体験についてご紹介いただき、南太平洋をフィールドとする人類学研究の魅力をお伝えします。



CFCの教会行事にて、伝統的な戦闘用カヌーを漕ぐ人びと。



ソロモン諸島ニュージョージア島の子どもたち。

## ソロモン諸島研究との出会い

【石川】 まず文化人類学との出会いについて聞かせていただけますか。

【石森】 私は大学時代経済学部にも所属し、当時経済発展がめざましかったASEAN、その中でも特にマレーシアに興味を持って統計資料を集めていたりしていました。でも実際にバックパックを背負ってボルネオ島を含めマレーシアの各地に何度か行ってみると、統計などの数値では拾えない部分もあるように思えてきました。というのも、数値上の目覚ましい発展の一方で、それを実感できない人びと、スラム的な場所に住むようになった人びともいたからです。そのような人びとの話を聞いているうちに、少なくとも自分が興味をもっているのは、数値では表せない人びとの生活であり、文化である、ということが分かりました。その中で文化人類学という学問があることを知り、大学院に進んで学び始めました。

【石川】 フィールドは最初からソロモン諸島だったのですか？

【石森】 いいえ、修士時代は、短期間でしたがフィジーをフィールドとして調査していました。その後、博士課程に進学してから東京大学大学院医学系研究科を中心に組織されたソロモン諸島研究プロジェクトに参加させていただき、ソロモン諸島で調査を始めました。ただ、大きな声ではいえませんが、当初、ソロモン諸島にはあまり行きたくなかったんです。大規模な紛争がおこっていましたし、フィジーと違ってマラリアもありますし（笑）。でも今ではソロモン諸島に行くと人びとに会い、村落で生活をともにし、そ

して調査することが本当に楽しいです。私がソロモン諸島に初めて行ったのは2001年のことですから、もう10年ほどの付き合いになりますね。

## ソロモン諸島ってどんなところ？

【石川】 ソロモン諸島といえば、第2次世界大戦中の日米の激戦地として、特に多数の日本人が戦死したガダルカナル島があることで知られています。この地域に住んでいる人びとについて説明していただけませんか。

【石森】 ソロモン諸島は、太平洋の南西部にあたるメラネシア地域に位置していて、1978年にイギリスの植民地支配から独立した新しい国です。人口は50万人ほどですが、言語の数は数え方によって100を超えます。2万人ぐらい話者のいる言語集団もあれば、私の調査地で話されるクサゲ語のように、話者が2000人に満たない言語も数多くあります。1つの島でも徒歩圏内の隣村では違う言語が話されていることも珍しくありません。そのため人びとは、意思疎通のために「ソロモン諸島ピジン」という媒介となる言語を作り出し、共通語として使用しています。この地域に住んでいるのは、オーストラリア先住民と祖先を同じくするオーストラロイド系の人びとのほか、彼らと混血したモンゴロイド系の人びとです。

【石川】 人口50万人で、言語数が100以上ですか。それぞれの言語集団で文化も異なるのでしょうか。

【石森】 はい。ソロモン諸島の東に位置するトンガ、サモア、ツバルといっ





ガダルカナル島のある村落の記念式典に参列した聖職者（ミニスター）に贈られた豚。

都市のマーケットで販売されているピンロウの実。この実とキンマの葉、そして石灰を口に含んで咀嚼する。

青年が描いたサイラス・エトの肖像画。

たポリネシアの島々に比べて、メラネシアでは言語と文化が極めて多様であることが特徴です。

**【石川】 ソロモン諸島ではどのようなものを食べているのですか？**

**【石森】** 主食は、伝統的にはタロイモやヤマイモだったのですが、現在では外来のサツマイモやキャッサバです。おかずは、やはり周囲の海で釣った魚ですね。ヤシガニやワタリガニは激ウマです。そういえば先月、ガダルカナル島でムササビを食べました、これは稀にしかありつけません。豚は貴重な財産なのでおもに饗宴のときだけです。また都市部を中心に、購入食品であるコメ、缶詰、インスタント麺なども食されています。そのほか嗜好品として、ピンロウの実をかむ習慣があります。かんでいるとぼーっとしてくるので、人びとは「ソロモンのビールだ」と言っています。

## フィールドは「生ける神」の村

**【石川】 ソロモン諸島での調査についてお聞かせください。**

**【石森】** ソロモン諸島は9つの州からなりますが、私が初めて調査したのはウェスタン州のヴァングヌ島です。この島では、おもに先ほどお話ししたソロモン諸島研究プロジェクトの共同調査を行いました。その中で、同州のニュージョージア島にクリスチャン・フェロウシップ教会（CFC）という教会があり、生身の人間が「生ける神」として崇拝されていることを知りました。それだけでも驚きだったのですが、この教会は州人口の約3分の

1を信徒とするなど相当の影響をもっていました。また、ベツレヘム、ナザレ、エデンなど聖書に由来する村落名も興味をそそりました。そしてパラダイスとよばれる村がCFCの本拠地と知り、そこで調査を始めることに決めました。もちろんその前に「生ける神」に実際に面会し、お許しをもらったことはいまでもありません。

**【石川】 CFCとはどのような宗教団体なのでしょう？**

**【石森】** CFCは、ニュージョージア島のサイラス・エトという人物が創始した新しい教会です。エトは、イギリス植民地時代に洗礼を受けた後、メソジスト教会のミッション・スクールで学びました。やがて彼は西洋人からも「祈りの人」と呼ばれるほど、熱心にキリスト教を信仰するようになりました。祈りに明け暮れる生活を送る中、彼は、「聖霊が体の中に入り込む」という神秘的な体験をし、また「人びとを新しい生活に導きなさい」という神の啓示を受けました。その後、彼は自分の出身地に帰って独自の方法で布教活動を展開するようになり、それがしだいにニュージョージア島で広がっていきました。メソジスト教会がこのような彼の活動に対する批判を強めたことから、エトはメソジスト教会との訣別を決意し、その結果1960年代にCFCが成立しました。

**【石川】 「人間を崇拝する」というのはどういうことでしょうか？**

**【石森】** エト自身が述べたわけではありませんが、CFCではエトは「生ける神」と信じられ、彼の家族も「ホーリー・ファミリー」と呼ばれています。





かつてエトが聖霊を吹き込んだという「ロープ」の前で礼拝を行うCFCの信徒たち。



パラダイス村は1956年から3年間の歳月をかけて完成した。当時の植民地行政官の中には、同村における規律正しい生活や整然とした家並みに感銘を受け、「モデル村にしよう」と主張した者もいたほどである。

エトは1983年に亡くなりましたが、次男がその地位を継いでいます。神が世襲されたわけです。その後、2005年に、次男は宗教活動と地域社会への貢献が称えられ、KBE（大英帝国勲章ナイト爵）の爵位を得ました。余談ですが、ビル・ゲイツも同じ年に同じ爵位を得ていますね。またホーリー・ファミリーは政界にも進出していて、現在2人が有力な国会議員になっています。

**【石川】 CFCの本拠地、パラダイス村はどのようなところなのでしょう？**

**【石森】** パラダイス村はニュージョージア島の北部にあります。それまでの生活とは異なる「新しい生活」を実現しようとするエトの理想を具体化した村で、CFC信者の共同作業によって建設されました。人口は約1000人で、これはメラネシアの村落としては異例の規模です。住居配置も特異で、同じ大きさ、同じ形態の家が等間隔を保ってV字型に並んで建てられています。

**【石川】 パラダイス村での調査は順調に進んだのでしょうか？**

**【石森】** 最初は大変でした。まずエトが興した運動がどのように拡大してCFCが成立したのかを知りたくて村人に尋ねたのですが、彼らにしてみれば神聖なことなのでみだりに語るべきではない、間違ったことを言うてはいけないという思いが強く、「私などではなくえらい方々に聞いてください」という反応ばかりでした。村人の前にレコーダーをどんと置いてペンを片手に「聞かぞ〜」と意気込んだことも悪かったと反省しています。とにかく早くたくさんデータを取りたいという一心で、相手を緊張させてしまっていたと思います。とくに信仰に関する事柄なんて、矢継ぎ早のやり取りで分かるはずがないですよ。

**【石川】 私は歴史学を専門としていますが、史料から情報を読み取る歴史学者とは異なる、人類学者ならではの苦労ですね。その後どうやって聞き取りができるようになったのでしょうか？**

**【石森】** とにかく村の人びとと生活をともにしつつ、毎晩ケロシンランプの灯りを頼りにその日に見聞したことをできるだけ詳細にノートに残すことを続けました。そうしているうちに段々聞き取りができるようになっていき

ました。例えば『生ける神』のことをどう考えている？」と聞くと人びとは答えに窮します。「分からない」とか「神は神だ」というでしょう。しかし、ある出来事が起こったとき、人びとはそれに対して「生ける神」の霊的な力が作用しているに違いないと考え、その出来事を語る際に「生ける神」に関する自らの見解を吐露することがあります。ただし、それは私がペンを片手に聞き出せるような情報ではありません。1日の仕事を終えた人びとが何気なく集まり、ビンロウの実でもかみながら、まったりと話をしているときに語られるような情報の類といえます。もちろん、そのような話には論理的な一貫性を欠く情報も多く含まれます。その一貫性の欠如の仕方にも何らかのルールがあるのかもしれないと思いながら辛抱強く聞き取りを重ねていきました。

**【石川】 人類学研究において情報を収集し、そこから何かを見出すことが一筋縄ではいかないことがよく伝わってきます。それにしてもここまで人びとの語りにこだわるのはなぜなのでしょう？**

**【石森】** もちろんCFCの幹部に聞けばいろいろと話してくれます。それはそれで重要ですが、そのような情報を積み上げても「公式パンフレット」と同じものしかできません。そのような語りでは得られない、しかしCFCというものをより深く知ることができるような情報が人びとの語りの中には豊かに含まれているからです。

**【石川】 なるほど。そのような聞き取り調査に基づいたCFC研究で博士号を取得なさり、近々博士論文が出版されるそうですね<sup>(1)</sup>。**

**【石森】** 博士論文ではCFCの全体像を明らかにすることを目的として、CFCの形成史に始まり、共同生活の実態など社会的側面、そして教会儀礼や信仰のあり方など宗教的側面について考察しました。メラネシアを対象とする人類学は、一般的に伝統文化に注目する傾向が強く、これまでキリスト教の現代的動向に関する研究は十分に行われてきませんでした。その理由の1つは、おもに欧米の人類学者にとって、キリスト教はメラネシアの文化ではなく自文化に属するという認識からでしょう。しかし、極めて熱心に信仰される教会について調べなければ、今を生きる南太平洋の人びとの暮らしを明らかにできないと思ってこの研究を始めました。とはいえこれほどまでにこの地域にキリスト教が根付いたのはなぜかという根本的な問題をはじめとして、解明されていない問題は依然として多く、興味はつきません。

## 紛争後社会をフィールドワークする

**【石川】 現在もニュージョージア島で調査を続けておられるのでしょうか？**

**【石森】** ソロモン諸島では1998年から2003年にかけて大規模な紛争が起きました。最近はこの紛争が人びとに与えた影響を調査するプロジェクトに参加して、主に首都ホニアラのあるガダルカナル島で人びとの紛争に対する認識、紛争下の経験について研究しています。

**【石川】 この研究はそれまでの宗教運動研究とは全く異なる新しい研究なのでしょう？**

**【石森】** いいえ、そうではありません。ソロモン諸島の紛争と同時期に南太平洋のいくつかの国々で同様の紛争が起きました。これらの紛争については、独立後の経済破綻がもたらした社会的不安定に原因を求める見解が現在主流です。このようなマクロな視点はもちろん重要ですが、紛争を経験した人びとの語りに耳を傾け、ミクロな視点から見ることを通して、それだけではこの紛争について十分理解できないのではないかと感じるようになりました。独立後の30年程度だけではなくより長い期間を対象とし、現在の紛争と過去の宗教運動に関わった人びとの認識に注目することにより、両者の連続性を明らかにするような研究が必要ではないかと考え、調査を進めています。

**【石川】 歴史学研究の立場からも大変興味深いご研究です。**

**【石森】** またこの紛争ではキリスト教会が秩序回復においても重要な役割を果たしました。教会は、有効な打開策を打ち出せない国家を尻目に、紛争の影響で生活に困窮する人びとを多方面から支援してきました。紛争の



当事者呼んで和解儀礼も執り行いましたし、各種の講習会や開発プロジェクトなども実施しています。人びとが国家や政治家を全く信用しておらず、いかに教会に頼っているのかが紛争を通して見えてきました。紛争についての人びとの経験、特に国家や教会との関係を詳細に調査することは、現在のソロモン諸島の人びとについて知る上で欠かせないものなのです。

## 理系研究者とフィールドへ

ソロモン諸島～数値の重要性を知る～

**【石川】** 石森さんは理系の研究者の方々との共同研究の経験が豊富で、ソロモン諸島で調査を始めたきっかけも理系中心の研究プロジェクトでしたね。

**【石森】** 東京大学大学院医学系研究科のソロモン諸島研究プロジェクトは、森林伐採が環境や人びとの生活様式へ与えた影響を明らかにすることを目的に行われました。私自身は森林伐採によって得られる現金収入が人びとの食生活と身体に与えた影響を調査するグループのお手伝いをしつつ、個人研究として土地所有慣行についての人類学的な研究を行いました。

**【石川】** 食事調査は長期に及ぶでしょうし、身体計測も統計的に意味のある結果を得るためのサンプル集めは大変でしょうね。

**【石森】** このときの食事調査はこれまでの調査の中で最も大変でしたし、身体調査では1000人以上の身体計測を手伝いました。私は数値で語れないものを知ろうとして人類学研究を始めたわけですが、逆にこのプロジェクトに加わって数値を導き出すことの大変さ、1つのグラフが汗の結晶であることがよく分かりました。例えば社会開発について複数の学問分野の研究者が集まって共同で研究をすると、人類学者だけが数値に弱く議論に参加できないことが往々にしてあります。これではいけないと思い、統計学の勉強も始めました。

ツバル～フィールドをともにして感じる～

**【石川】** 地球温暖化による海面上昇の影響が心配されているツバルで、理系研究者と共同調査をなさいましたね。AA研の海外学術調査総括班フォーラムでも報告していただき、大きな反響を呼びました<sup>(2)</sup>



ツバルにおける浸水の様子。サンゴ礁起源のツバルの島々は平均海拔が1.5メートルほどであり、島の周囲の潮位が上昇すると、内陸部から海水が湧き出してくる。

**【石森】** このプロジェクトの目的は、環境変化に脆弱な太平洋の環礁において、どのような変化が起こっているのか、また今後どのような変化が起こりえるのかを明らかにすることで、海洋生物学、海岸工学、地質考古学、文化人類学など複数の学問分野の研究者が集まった文理融合プロジェクトでした。短期間の調査でしたが、いろいろと学ばせていただきました。

**【石川】** この調査で驚いたことはありますか？

**【石森】** まずは調査にかかる時間の違いです。人類学研究では初めての地域に行って1週間ですることは限られていますが、理系研究者は1週間程度で集中的にデータやサンプルを収集します。また理系研究者がGPSなどの機材の扱い方に習熟しているということもさることながら、例えば、地質考古学の専門家は、私が全く気づかない微妙な地形の差異を見抜くこと、そこに深い意味があることに驚かされました。一緒に調査をしていて理系の人たちもよい意味で感性に基づいて研究をしており、共有できるものがあることに気づいたこともよい経験でした。同じときに同じフィールドで調査をしたからこそ知ることができたのだと思います。

Fieldnet～新たな共同研究に向けて～

**【石川】** 本誌第4号で紹介しておりますが、AA研ではFieldnetというフィールドワークを行う研究者のネットワークを組織しています。石森さんはこのプロジェクトの立ち上げから現在まで中心的に活動していますね。Fieldnetという「名付け」にも関わったと聞きました。現在はAA研のスタッフとして運営に関わっておられます。

**【石森】** はい。Fieldnetもかなり参加者が増えてきました。最近南太平洋に関する入門書を出版したのですが、その執筆者探しをするときにも役に立ちました<sup>(3)</sup>。研究者同士が知り合うという役割をもっと果たせるように、またそれがしやすいシステムになるように改善していかなければならないと思っています。GPSの扱い方など自分たちがフィールドワークを行う上で学ばなければならないと思った技術などの講習会も「Fieldnetワークショップ」として実現しています。Fieldnetが個人研究の質を高め、また新たな共同研究を生み出す場になるように、今後も運営に関わっていきたいと考えています。

**【石川】** 最後に、石森さんにとって文化人類学の魅力とはなんですか？

**【石森】** フィールドに赴いて人びとと生活をともにし、自文化との違いから生じるわくわくするようなカルチャー・ショックを通して、異文化を理解していくことにあると思います。

**【石川】** 今回のインタビューを通してそのような文化人類学の魅力が読者の方々にも伝わったと思います。本日はありがとうございました。



アングリカン系メラネシア教会の修道士たち。彼らは、首都ホニアラで顕在化した紛争の終息に向けて多大なる貢献をした。

聞き取り調査の様子。



ニュージョージア島の村落付近を縦横にはしる森林伐採業者の林道。近年、とくにインドネシアやマレーシア系企業がソロモン諸島で伐採操業を盛んに行っている。

(1) 石森大知『生ける神の創造力——ソロモン諸島クリスチャン・フェローシップ教会の民族誌』（世界思想社、2011年2月刊行予定）  
 (2) 海外学術調査総括班フォーラムについては下記ページをご参照ください。  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~gisr/forum.html>  
 (3) 吉岡政徳・石森大知編『南太平洋を知るための58章——メラネシア・ポリネシア』（明石書店、2010年）